

～ 作況指数は **103** (宮城県 東部) ,  
一等米比率は **90.5%** (宮城県) ～  
令和2年11月末現在

## 稲作期間の気象経過

◎ 気温と日照時間は、5月は中旬前半まで高温・多照、5月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照、5月下旬後半から6月中旬まで高温・多照、7月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照、8月は高温・多照で経過しました。降水量は、6月下旬から梅雨明けした8月上旬まで多くなりました。(図1、表1)

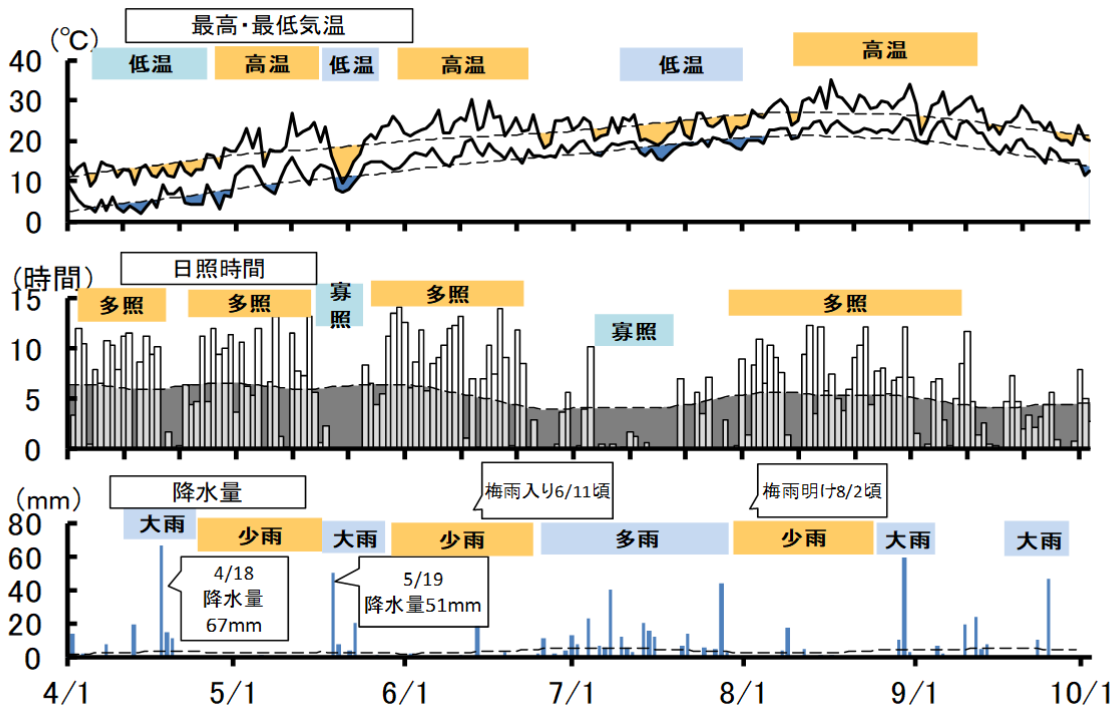


図1 令和2年水稲栽培期間の気象経過図(アメダス石巻)

表1 令和2年産水稲栽培期間の気象概要

月	天気概況	
4月	高気圧と低気圧が交互に通過し、天気は周期的に変化した。18日から19日にかけては、低気圧の影響で大雨となった。下旬は寒気が入りやすかったため気温は低かった。 ▶平均気温:低い(-0.3℃)▶:多い(177%)▶日照時間:多い(110%)	播種 育苗期
5月	高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、中旬の後半から下旬の中頃にかけてはオホーツク海高気圧からの湿った空気や低気圧の影響で曇りや雨の日が多く、冷たい風の影響で一時的に気温が低くなった。 ▶平均気温:かなり高い(+1.4℃)▶降水量:年間並(96%)▶日照時間:年間並(96%)	田植期 活着期
6月	高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、下旬はオホーツク海高気圧からの湿った空気や低気圧の影響で曇りや雨の日が多く、期間の中頃はオホーツク海高気圧の影響で、気温の低い日があった。 ▶平均気温:かなり高い(+2.2)▶降水量:かなり少ない(42%)▶日照時間:かなり多い(126%)	分けつ期 最高分けつ期
7月	梅雨前線や低気圧、オホーツク海高気圧からの湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、気温は低かった。たびたび大雨となつて、石巻では通年の月間日照時間の少ない方からの1位を更新した。 ▶平均気温:低い(-1.1)▶降水量:かなり多い(171%)▶日照時間:かなり少ない(41%)	幼穂分化期 穂ばらみ期
8月	暖かい空気をもつ高気圧に覆われて晴れの日が多く、気温は高かった。下旬の終わりにはオホーツク海高気圧の影響で曇りや雨となり、気温が低くなった。 ▶平均気温:高い(+1.7℃)▶降水量:年間並(90%)▶日照時間:多い(127%)	出穂期
9月	前線や低気圧の影響、また、湿った空気が流れ込んだことで、曇りや雨の日が多かった。 ▶平均気温:高い(+1.6℃)▶降水量:年間並(89%)▶日照時間:少ない(81%)	成熟期 刈り取り

※ 参考資料 : 「2020年の月の天候(宮城県)」(仙台管区気象台)

## 生育経過

### 1 育苗期

- ◎ 管内の播種盛期は4月8日で、前年より1日、平年より2日早くなりました（表2）。
- ◎ 4月中下旬の気温が低め、日照時間が少なめに経過したことから、苗の草丈は短めとなりました。一昨年、多発したもみ枯細菌病は一部の育苗ハウスで発生が確認された程度でした。
- ◎ 一部の育苗ハウスではばか苗病が確認されました。

### 2 田植期

- ◎ 管内の田植盛期は5月7日で、前年より4日、平年より3日早くなりました（表3）。
- ◎ 5月上旬が高温・多照で経過し、晴れの日が続いたことから、田植え作業は順調に進みました。
- ◎ 5月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照だったことから初期の分けつの発生が緩慢となりました。

### 3 活着期～出穂後

- ◎ ひとめぼれ生育調査ほ

草丈は、6月20日から7月10日まで平年を上回って推移しましたが、7月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照だったことから、稈長は平年並みとなりました。茎数は、5月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照だったことから、7月10日まで平年を下回って推移しましたが、穂数は平年並みとなりました。葉数は、6月は平年を下回って推移し、7月に入って平年並みとなりました。葉色は、7月20日まで平年を上回って推移しましたが、その後急激に低下しました（図2）。

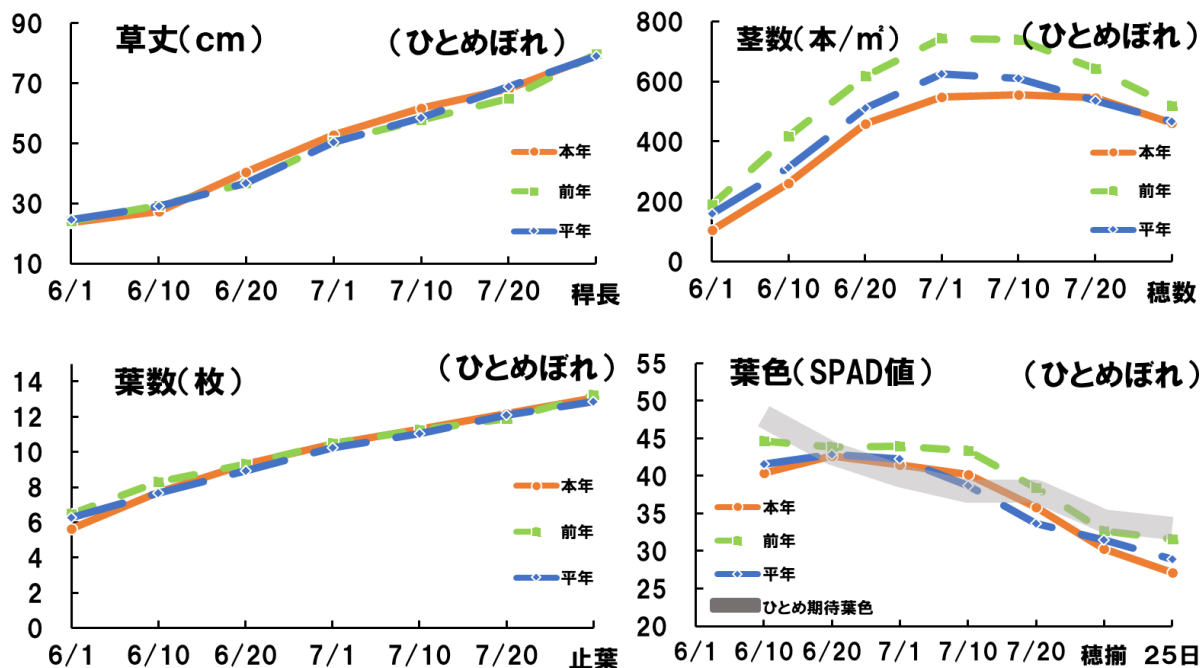


図2 ひとめぼれの生育の推移

※生育調査ほの設置場所は石巻市河南と東松島市矢本で、数値は2箇所の平均  
※平年値は過去5年間の平均

表2 播種時期

項目		始期 (5%)	盛期 (50%)	終期 (95%)
管内	本年	3月31日	4月8日	4月22日
	前年	4月1日	4月9日	4月23日
	平年	3月31日	4月10日	4月22日
	平年差	平年並	2日早い	平年並
県全体	本年	4月2日	4月11日	4月23日
	前年	4月3日	4月12日	4月20日
	平年	4月2日	4月11日	4月21日
	平年差	平年並	平年並	2日遅い

※管内の平年値は過去5年間の平均値。県全体の平年値は、最大・最小値を除く過去10年間の平均値。

表3 田植時期

項目		始期 (5%)	盛期 (50%)	終期 (95%)
管内	本年	5月2日	5月7日	5月20日
	前年	5月4日	5月11日	5月20日
	平年	5月3日	5月10日	5月20日
	平年差	1日早い	3日早い	平年並
県全体	本年	5月4日	5月11日	5月23日
	前年	5月4日	5月11日	5月22日
	平年	5月4日	5月11日	5月21日
	平年差	平年並	平年並	2日遅い

※管内の平年値は過去5年間の平均値。県全体の平年値は、最大・最小値を除く過去10年間の平均値。

◎ ササニシキ生育調査ほ

草丈は、7月10日に平年を上回りましたが、7月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照だったことから、稈長は平年よりやや短くなりました。茎数は、7月1日に平年を下回りましたが、穂数は平年並みとなりました。葉数は、期間をとおして平年を下回って推移しました。葉色は、7月20日まで平年を上回って推移しましたが、その急激に低下しました（図3）。

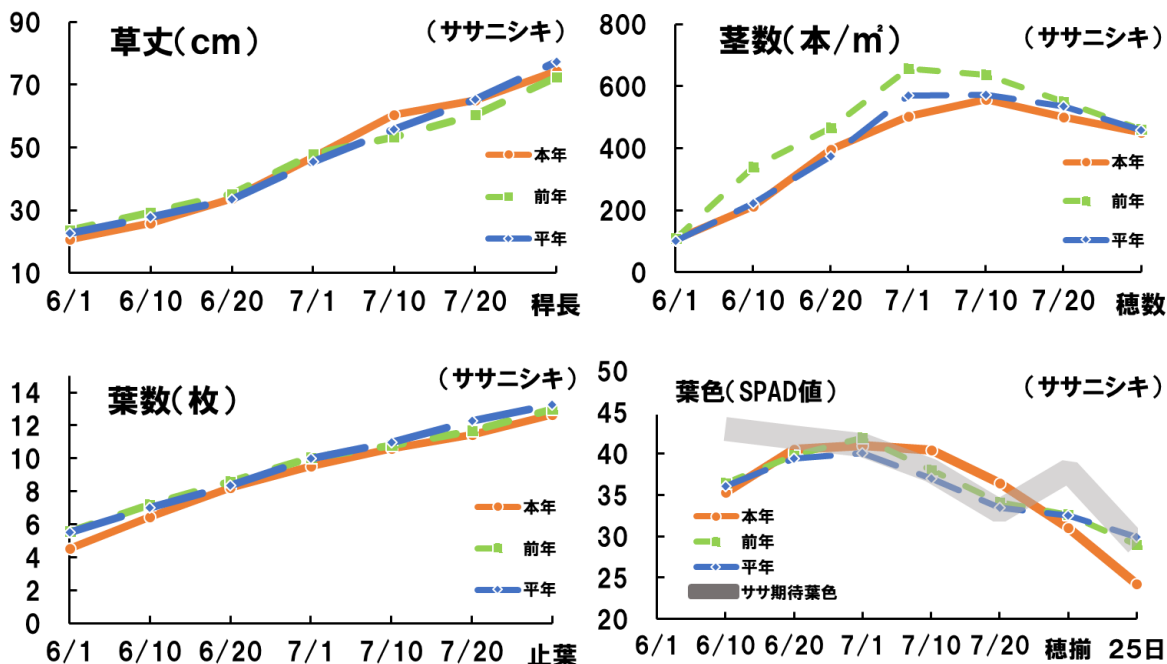


図3 ササニシキの生育の推移

※生育調査ほの設置場所は石巻市桃生，稲井で，数値は2箇所平均

※平年値は過去5年間の平均

4 出穂状況

◎ 管内の水稻の出穂盛期は8月5日で平年より4日遅くなりました。北部平坦と仙台湾岸が8月5日、三陸沿岸が8月7日となりました（表4）

今年は、5月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照，7月中旬後半から下旬前半にかけて低温・寡照により，平年に比べて遅くなりました。

表4 管内の出穂状況

地域区分	出穂期 (月日)	穂揃期 (月日)
北部平坦	8月5日	8月12日
仙台湾岸	8月5日	8月12日
三陸沿岸	8月7日	8月14日
石巻地域 (平年差)	8月5日 (+4日)	8月12日 (+2日)
宮城県	8月6日	8月12日



※ 出穂期，穂揃期は，それぞれ水稻作付見込面積の50%，95%以上が出穂期に達した日。平年値は，過去5か年平均。

5 登熟期～成熟期

◎ 登熟期間をとおして平年に比べて気温は高めに経過したため，登熟が良好となりました。最高気温は前年と平年に比べて高めに経過しましたが，最低気温は前年に比べて低めに経過し，日較差も多くなりました。日照時間も前年と平年に比べて多く経過しました。以上から前年に比べて，白未熟粒（心白粒，腹白粒）の発生・混入が少なかったと考えられます（表5）。

表5 出穂期後の気象経過（アメダス石巻）

出穂期 後日数	最高気温（℃）				最低気温（℃）				日較差（℃）				日照時間（h）			
	本年	前年	平年	平年差	本年	前年	平年	平年差	本年	前年	平年	平年差	本年	前年	平年	平年比
1-10日	29.4	29.6	27.1	2.3	23.0	23.6	21.2	1.8	6.4	6.0	5.8	0.6	59.8	58.5	55.8	107
11-20日	29.7	28.4	26.9	2.8	23.0	23.1	21.0	2.0	6.7	5.4	5.8	0.8	72.6	38.3	54.0	134
21-30日	28.9	26.9	26.5	2.5	22.9	20.8	20.3	2.5	6.1	6.0	6.2	-0.1	52.3	43.6	52.3	100
31-40日	26.9	27.1	25.3	1.6	21.5	21.2	19.0	2.5	5.4	5.9	6.3	-0.9	35.5	53.0	45.0	79
41-50日	24.9	23.8	23.5	1.4	17.9	17.1	16.8	1.1	7.0	6.7	6.7	0.3	39.0	46.5	42.4	92

※出穂期 本年：8月5日，前年：8月3日，平年（5か年平均）：8月1日

※日照時間の平年比の単位は%

## 6 刈取状況

◎ 刈取始期は平年より2日早い9月18日、盛期も2日早い9月28日となりました。今年は、刈取作業が始まってから、定期的にまとまった降雨があり、終期は平年よりも1日遅い10月13日となりました(表6)。

### 収量

#### 1 令和2年産水稻の作柄 (東北農政局)

区分	作柄の良否(作況指数)
	やや良(105~102)

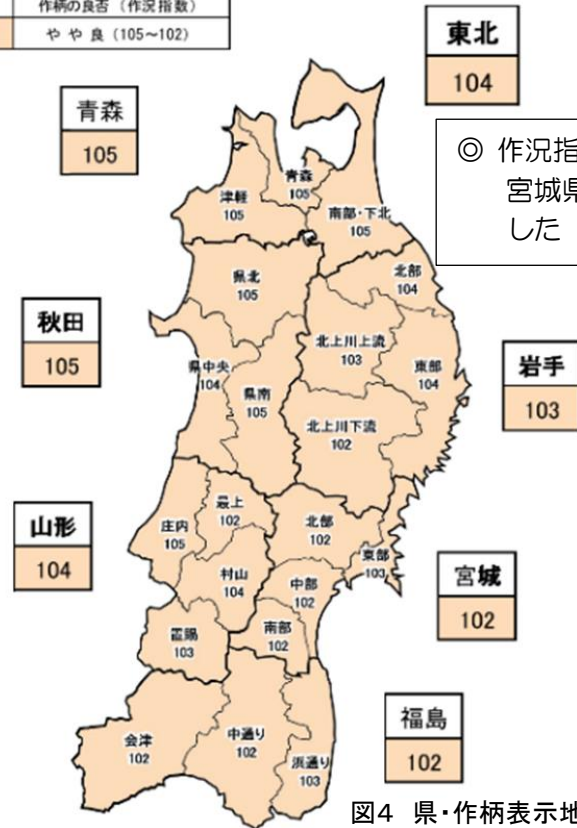


図4 県・作柄表示地帯別作況指数

表6 刈取状況

項目		始期 (5%)	盛期 (50%)	終期 (95%)
管内	本年	9月18日	9月28日	10月13日
	前年	9月18日	9月28日	10月10日
	平年	9月20日	9月30日	10月12日
	平年差	2日早い	2日早い	1日遅い
県全体	本年	9月19日	9月29日	10月14日
	前年	9月19日	9月29日	10月15日
	平年	9月20日	9月30日	10月12日
	平年差	1日早い	1日早い	2日遅い

※管内の平年値は過去5年間の平均値。県全体の平年値は、最大・最小値を除く過去10年間の平均値。

○10a当たり予想収量は、1.70mmのふるい目幅で選別された玄米の重量である。  
○作況指数は、全国農業地域ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるいの目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅(東北は1.85mm)以上に選別された玄米を元に算出した数値である。

令和2年産水稻の作付面積及び予想収穫量(10月15日現在)(東北)【東北農政局令和元年10月30日公表】より

表7 宮城県におけるうるち玄米の1等米比率(東北農政局)

	R02	R01	H30	H29	H28
一等米比率	90.5	67.3	91.6	85.5	90.6

※ R02は令和2年11月末現在, R01は令和2年3月末現在, H30前は確定値。

表8 宮城県における水稻うるち玄米の2等以下の格付け理由と総検査数量に対する割合(東北農政局,令和2年11月末現在)

R02		R01	
着色粒	6.8%	形質	30.1%
形質	2.3%	着色粒	2.0%
被害粒	0.2%	被害粒	0.3%

- ・着色粒とは、粒面の全部又は一部が着色した粒及び赤米をいう。ただし、とう精によって除かれ、又は精米の品質及び精米歩合に著しい影響を及ぼさない程度のもを除く。
- ・形質とは、皮部の厚薄、充実度、質の硬軟、粒ぞろい、粒形、光沢並びに肌すれ、心白及び腹白の程度をいう。
- ・被害粒とは、損傷を受けた粒(発芽粒、病害粒、芽くされ粒、虫害粒、胴割粒、奇形粒、茶米、砕粒等)をいう。

7月20日頃の低温・寡照により、粳が小さくなったと推察されます。また、8月に入って気温が高く経過したことから、玄米の登熟が良好となり、玄米が大きくなったと推察されます。これらの要因により、登熟後半に割れ粳が発生しました。その結果、カメムシによる着色粒が発生し、玄米の頂部加害型の混入は少なかったのですが、側部加害型の混入が多くみられました(表8)。



### 3 生育調査ほ収量調査結果

〔ひとめぼれ〕

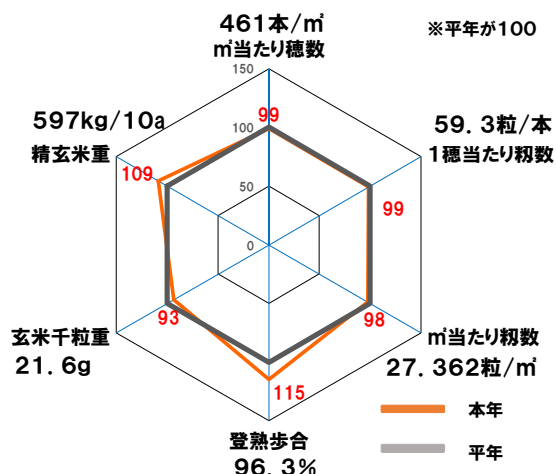


図5 収量構成要素(ひとめぼれ)

〔ササニシキ〕

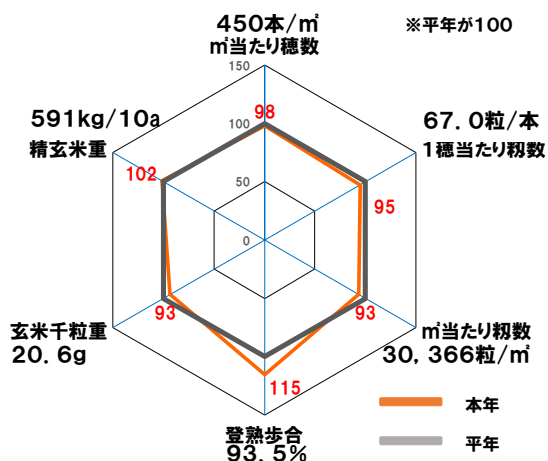


図6 収量構成要素(ササニシキ)

### 4 収量構成要素(生育調査ほの解析)

#### ○ ㎡当たり穂数

・5月中旬後半から下旬前半の低温により、生育が一時停滞したため、最高分げつ期ごろまで茎数は少なく推移し、有効茎歩合が高くなりました。㎡当たり粒数は、ひとめぼれは平年並み、ササニシキはやや少なくなりました(図5, 6)。

#### ○ 1穂当たり粒数

・7月中旬から下旬の低温があり、ひとめぼれは平年並み、ササニシキは低温の影響で幼穂の発育が停滞し、やや少なくなりました(図5, 6)。

#### ○ 登熟歩合

・ひとめぼれ、ササニシキともに、登熟期間高温が続いたことから、高くなりました。また、㎡当たり粒数が少なくなったことも要因と考えられます(図5, 6)。

#### ○ 千粒重

・ひとめぼれ、ササニシキともに、平年に比べ粒厚は厚かったものの、玄米の長さが短く、幅が小さくなったため、平年に比べ小さくなりました。これは、出穂後の高温が続いたことから、登熟が速くが進み、玄米の縦の伸長や幅が十分に膨らむことが終わる前に粒の大きさが決まったためと考えられます(図5, 6)。

#### 〔説明〕

##### ○ 収量構成要素の特徴

- ・㎡当たり穂数: 平年並
- ・1穂当たり粒数: 平年並
- ・㎡当たり粒数: やや少ない
- ・登熟歩合: 高い
- ・千粒重: 少ない
- ・精玄米重: 多い

〔本年 597kg/10a, 平年 549kg/10a〕

##### 〈参考〉間取り実収量

〔本年 525kg/10a, 前年 525kg/10a〕

※設置場所: 石巻市河南, 東松島市矢本

※平年: H27~R1の5か年平均

#### 〔説明〕

##### ○ 収量構成要素の特徴

- ・㎡当たり穂数: やや少ない
- ・1穂当たり粒数: やや少ない
- ・㎡当たり粒数: 少ない
- ・登熟歩合: 高い
- ・千粒重: 少ない
- ・精玄米重: やや多い

〔本年 591kg/10a, 平年 581kg/10a〕

##### 〈参考〉間取り実収量

〔本年 555kg/10a, 前年 510kg/10a〕

※設置場所: 石巻市桃生, 稲井

※平年: H27~R1の5か年平均

〔平年との比較〕

106以上	多い(高い)
105~102	やや多い(高い)
101~99	平年並み
98~95	やや少ない(低い)
94以下	少ない(低い)

## 次年度に向けた技術対策

### 1 登熟期の葉色低下対策

◎ 地力の低下や追肥の不足によって、穂揃期以降に葉色が薄くなり過ぎて、登熟歩合の低下、高温時の白未熟粒の増加を招いている傾向がみられます。

#### 〔土づくりによる地力向上〕

◎ 地力低下の原因として、有機物（堆肥・稲わら）の施用量減少による土壤有機物の消耗や、畑地化での連年利用による土壤有機物の分解促進が考えられます。

◎ 土づくり肥料は、散布コスト・労力面から施用量が減少しています。

◎ 土づくりにより次のような効果が期待できます。

- ① 堆肥・稲わらの連用により、地力・保肥力の向上、土壤物理性の改善、栄養成分（ケイ酸・加里等）の供給がはかられます。
- ② 土づくり肥料のうち、ケイ酸質肥料は耐倒伏性強化、登熟向上及び病害虫被害軽減、リン酸質肥料は低温時の活着促進や分けつ促進がはかられます（表9）。

表9 水田土壌タイプ別堆肥と土づくり肥料施用の目安

土壌タイプ	土づくり肥料		堆肥 ※ (t/10a)
	ケイ酸質 (kg/10a)	リン酸質 (kg/10a)	
黒ボク土	120 ~ 160	60 ~ 120	1.0 ~ 1.5
灰色低地土	60 ~ 100	40 ~ 100	1.0 ~ 1.5
グライ土	80 ~ 100	40 ~ 100	1.0 ~ 1.2
黒泥・泥炭土	120 ~ 160	60 ~ 120	0.8 ~ 1.0

表10 牛ふんたい肥の全窒素含量に基づく肥効判断指標

全窒素含有量 (現物当たり%)	牛ふん堆肥 窒素有効化率(%) ±標準偏差	代替率(上限) (%)
1%未満	10±4	20
1~1.5%	18±6	30
1.5~2%	27±7	30

※稲わらやもみから主体の堆肥施用量

#### 【牛ふん堆肥の肥料効果】

1%の窒素を含む牛ふん堆肥を1t/10a散布したときの窒素施用量は $1,000\text{kg} \times 1\% = 10\text{kg}$ 、表10より、牛ふん堆肥窒素有効化率を20%(表10の $18 \pm 6$ を20と想定した)とすると、稲作一作期間に分解する窒素は10a当たり $10\text{kg} \times 20\% = 2\text{kg}$ と算出できます。

#### 【穂肥による葉色低下防止】

◎ 幼穂形成期頃の葉色が期待葉色値の範囲内であっても、穂肥をしないと穂揃期の葉色は期待葉色値(33~35ポイント)より低下する傾向がみられます。登熟期間の窒素栄養を高めるためには、減数分裂期(出穂前15日~10日頃)の追肥が有効です(表11)。

表11 ひとめぼれの生育目標

	分けつ 最盛期頃	最高分けつ 期前頃	幼穂 形成期頃	減数分裂期	穂揃期	出穂後25日
草丈・稈長(cm)	32 ~ 34	45 ~ 48	56 ~ 59	66 ~ 69	-	82 ~ 85(稈長)
茎数・穂数(本/m <sup>2</sup> )	310 ~ 360	460 ~ 520	470 ~ 530	450 ~ 500	-	410 ~ 460(穂数)
葉緑素計値	41 ~ 44	40 ~ 42	38 ~ 40	35 ~ 37	33 ~ 35	33以下

## 2 適正な粒数の確保

◎ ひとめぼれの適正粒数は、 $m^2$ 当たり28千粒～30千粒になっていますが、粒数が不足して減収している事例がみられます。次の目安を参考に基肥・追肥の量を調整しましょう。

- ①基肥として10a当たり窒素成分1kg増やすと約1,500粒/ $m^2$ の粒数の増加が期待できます。  
 ②幼穂形成期の追肥として10a当たり窒素1kgを施用すると1,500～2,000粒/ $m^2$ の粒数の増加が期待できます。

## 3 ばか苗病防除

- ◎ 温湯消毒種子を保管する時に、種籾の水分含有率が高いと、ばか苗病の発生が多くなります。種籾の配布後すぐに浸種（水漬け）しない場合には、軒下など雨の当たらない風通しの良い場所に吊すなど、網袋の中まで十分乾燥させて保管しましょう。また、作業場など周辺環境（稲わら、もみ殻など）からも感染しますので、近くで保管しないようにしましょう。
- ◎ ばか苗病は、浸種温度が高いほど、催芽温度が低いほど発病苗率が高まり、また、加温出芽より無加温出芽で発病苗率が高くなります（図7）。浸種は、こまめに水を交換し、低い温度でじっくり・ゆっくりに行いましょう。催芽は、適切な温度（30℃付近）でムラ無く催芽しましょう。出芽は、加温出芽（30℃）が望ましいですが、無加温出芽の場合は、被覆資材等で温度低下を軽減しましょう。

温湯消毒と生物農薬（タフブロック等）を組み合わせると防除効果が高くなります。プール育苗の常時箱上湛水でばか苗病の感染による発症が抑制されることが報告されています。

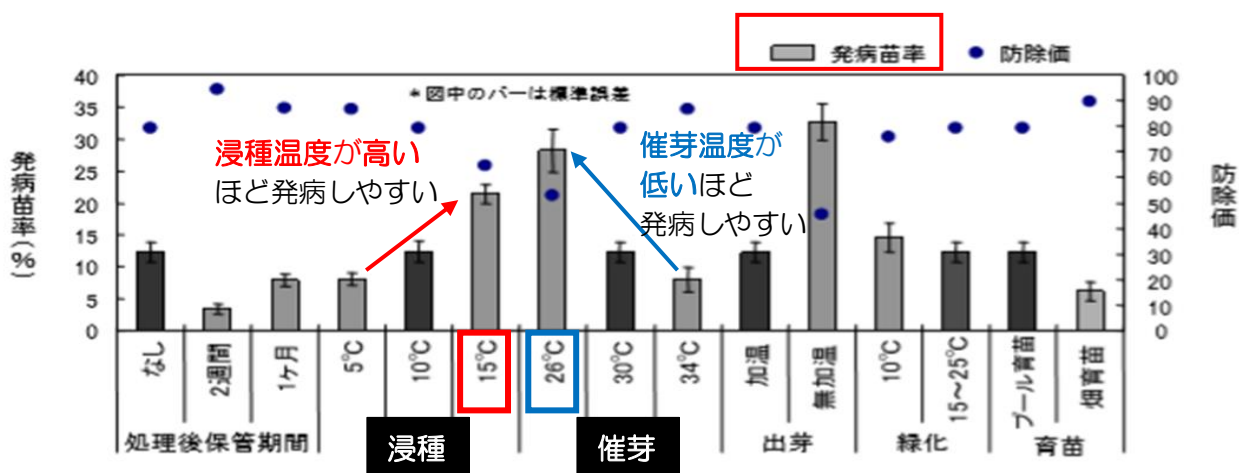


図7 種子管理および育苗管理の違いがばか苗病の発生に及ぼす影響(古川農試)

## 4 もみ枯細菌病（細菌性苗腐敗症）防除

- ◎ 購入した種籾でも塩水選を行いましょう（塩水選による保菌籾の除去効果が高い）。
- ◎ 浸種時の水温が高いと感染しやすいので、水温は10～13℃を目安にしましょう。
- ◎ 催芽温度を32℃以上になると発病しやすいので、催芽温度は28～30℃にしましょう。
- ◎ 出芽時の高温（32℃以上）で発病しやすくなるので、出芽・育苗初期には32℃以上にならないようにしましょう。また、灌水量が多すぎると感染を助長するので、過度の灌水は避けましょう。



写真1 もみ枯細菌病の症状

- ◎ 温湯消毒と生物農薬（タフブロック等）を組み合わせると防除効果が高くなります。育苗中の高温多湿は避ける（発育適温は30～35℃で主に種子伝染するが、土壌伝染のおそれもある）

## 5 斑点米カメムシ類防除

- ◎ 毎年、斑点米カメムシ類による着色粒が原因で落等しています。カメムシ類の繁殖源となる周辺雑草地や畦畔雑草は、7月20日（出穂10日前）頃までには必ず刈取ってください。
- ◎ ノビエ、イヌホタルイ等の雑草は斑点米被害を助長するので、雑草を適切に防除しましょう。

## 6 除草剤の適正使用による雑草防除

- ◎ オモダカやコウキヤガラなどの発生が多い場合には、ピラクロニルを含む初期剤と一発処理剤との体系防除が有効です。
- ◎ 初期剤や一発処理剤の効果を最大限得るため、次の点に注意しましょう。

- ① 水持ちの悪いほ場では、畦畔の補修や代かき回数を増やすなど、漏水対策を徹底する。
- ② 耕起～代かきを通じて均平を心掛け、田面の高低差による効果ムラをなくす。
- ③ 植代から田植えまでの日数が長くなると、雑草が発生しやすくなるので注意するとともに、雑草を良く観察し、ラベルに記載された使用時期を守る（「～ノビエ〇葉期」等）。
- ④ 処理後7日間は湛水状態を保ち、落水、かけ流し等を行わない。また、田面水が減少し、田面が露出しそうな場合には、できるだけ静かに用水を補充する。

※農薬の使用に当たっては、最新の登録内容を確認の上、適用の範囲でご使用ください。

表12 生育ステージ毎の生育量の目安

品種	幼穂形成期			減数分裂期		出穂期	
	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD値)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD値)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD値)
ひとめぼれ	56～59	470～530	38～40	450～500	35～37	410～460	33～35
ササニシキ	62～68	720～760	34～36	550～580	32～34	480～510	34～36
つや姫	70～75	550～580	35～37	—	—	430～470	31～33
だて正夢	64～70	390～460	40～42	380～420	37～39	350～400	35～37
金のいぶき	65～70	570～620	33～35	490～540	30～32	460～510	31～33

表13 収量構成要素の目安

品種	栽植密度 (株/坪)	収量 (kg/10a)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	籾数 (粒/本)	籾数 (千粒/m <sup>2</sup> )	登熟歩合 (%)	玄米 千粒重(g)
ひとめぼれ	60～70	550	410～460	60～70	28～30	85～90	22.3
ササニシキ	70以上	540	480～510	54～64	28～30	80～85	21.4
つや姫	60～70	510～540	400～440	73～75	30～33	75～80	22.0
だて正夢	60～70	540	350～400	85～95	30～34	75～85	21～21.5
金のいぶき	60	510～540	460～510	62～68	30～33	70～75	22.4～23.0



# だて正夢と金のいぶき展示ほの調査結果

だて正夢現地技術普及展示ほ（※平年はH29～R1の3ヵ年平均）

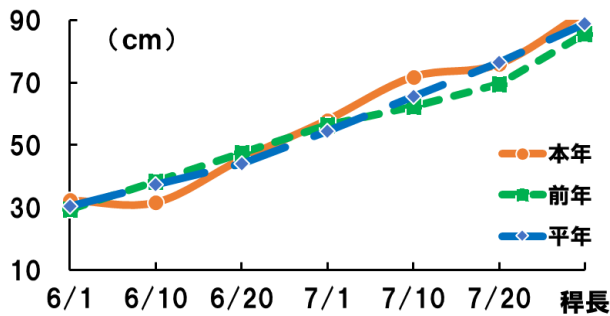


図8 草丈の推移

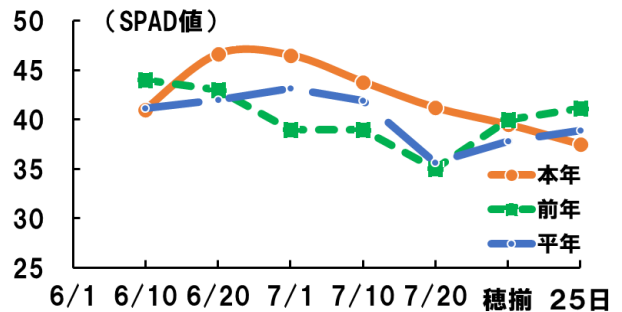


図10 葉色の推移

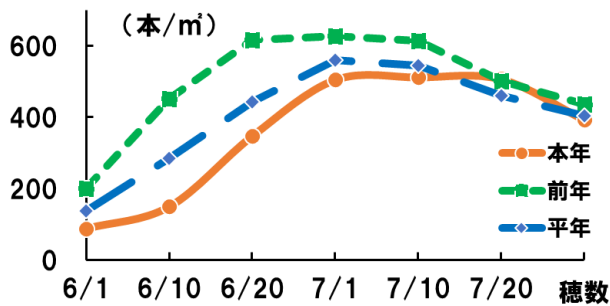


図9 茎数の推移

- ◎ 草丈は7月10日まで長めに推移しましたが、稈長は平年並みとなりました(図8,表14)。
- ◎ 茎数は平年を下回って推移しましたが、穂数は平年並みとなりました(図9,表14)。
- ◎ 葉色は平年を上回って推移しましたが、登熟期は平年並みとなりました(図10,表14)。

◎収量構成要素では、穂数が収量構成要素の目安の範囲内となりましたが、1穂粒数が多く、 $m^2$ 当たり粒数が多くなりました。また、登熟歩合も高くなりました。千粒重は小さくなりましたが、精玄米重は669kg/10aと目安を上回りました。(表15,図11)。

表14 本年の生育ステージ毎の生育量と目安

品種	幼穂形成期			減数分裂期		穂揃期	
	草丈 (cm)	茎数 (本/ $m^2$ )	葉色 (SPAD値)	茎数 (本/ $m^2$ )	葉色 (SPAD値)	穂数 (本/ $m^2$ )	葉色 (SPAD値)
本年	71.8	512	43.8	507	41.2	393	39
目安	64 ~ 70	390 ~ 460	40 ~ 42	380 ~ 420	37 ~ 39	350 ~ 400	35 ~ 37

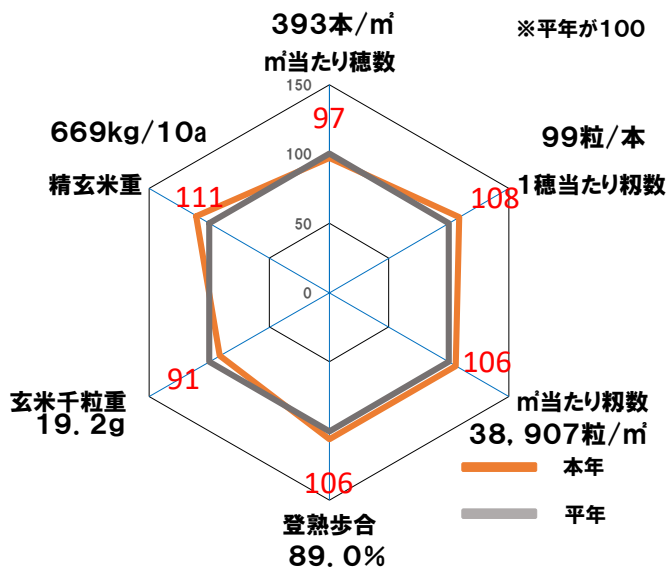


図11 本年のだて正夢の収量構成要素と目安

表15 だて正夢の収量構成要素

項目	本年	平年	平年比	目安
$m^2$ 当り穂数(本)	393	405	97%	350~400
1穂当り粒数(粒)	99.3	91.3	108%	85~95
$m^2$ 当り粒数(百粒)	390	368	106%	300~340
登熟歩合(%)	89.0	83.9	106%	75~85
玄米千粒重(g)	19.2	21.1	91%	20.0~21.5
精玄米重(kg/10a)	669	605	111%	540

(平年はH29～R1の3ヵ年平均)

## 2 金のいぶき 現地技術普及展示ほ

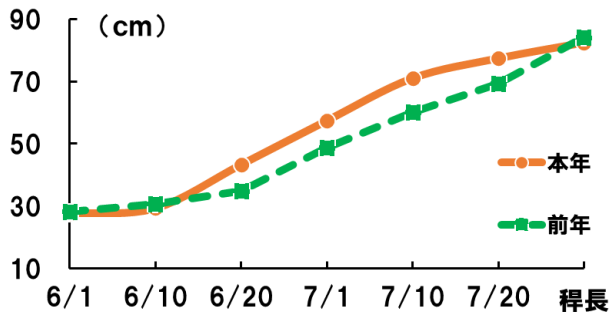


図12 草丈の推移

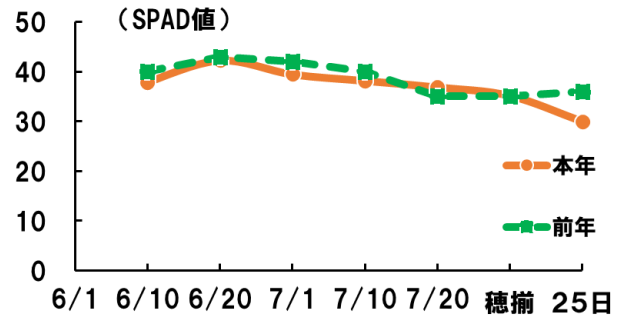


図14 葉色の推移

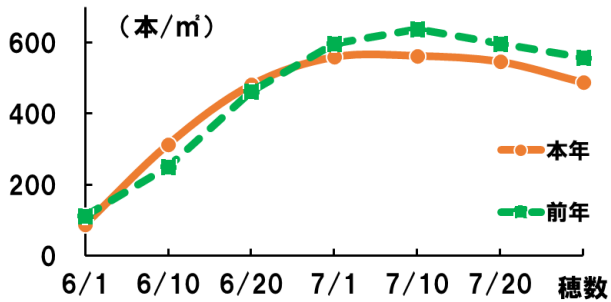


図13 茎数の推移

- ◎ 草丈は前年を上回りました(図12,表16)。
- ◎ 茎数は6月下旬から生育量の目安を下回って推移しましたが、穂数は収量構成要素の目安の範囲内でした(図13,表16)。
- ◎ 葉色は生育量の目安を上回って推移しました(図14,表16)。

◎ 収量構成要素では、生育量の目安と比較すると、穂数は範囲内となりましたが、その他の一穂粒数、 $m^2$ 当たり粒数が多く、登熟歩合が高く、千粒重が小さかったものの精玄米重は多くなりました(表16,図15)。

表16 本年の生育ステージ毎の生育量と目安

品種	幼穂形成期			減数分裂期		穂揃期	
	草丈 (cm)	茎数 (本/ $m^2$ )	葉色 (SPAD値)	茎数 (本/ $m^2$ )	葉色 (SPAD値)	穂数 (本/ $m^2$ )	葉色 (SPAD値)
本年	71	563	38	546	37	488	35
目安	65 ~ 70	570 ~ 620	33 ~ 35	490 ~ 540	30 ~ 32	460 ~ 510	31 ~ 33

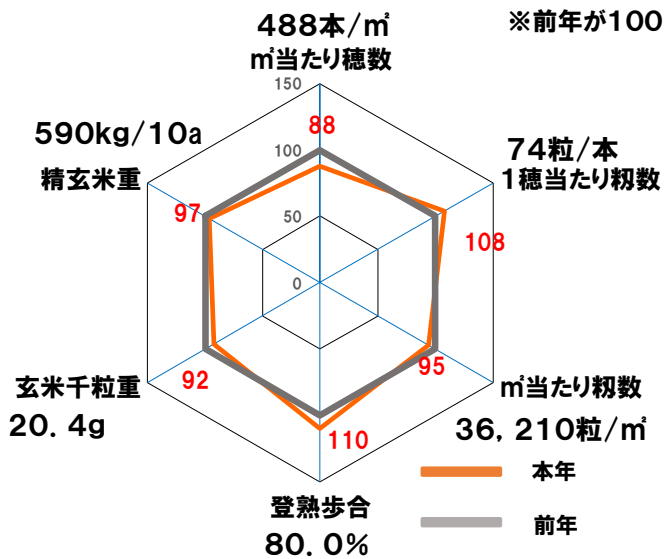


図15 本年の金のいぶきの収量構成要素と目安

表17 金のいぶきの収量構成要素

項目	本年	前年	前年比差	目安
$m^2$ 当たり穂数(本)	488	557	88%	460~510
1穂当たり粒数(粒)	74.2	68.8	108%	60~68
$m^2$ 当たり粒数(百粒)	362	380	95%	300~330
登熟歩合(%)	80.0	72.9	110%	70~75
玄米千粒重(g)	20.4	22.1	92%	22.4~23.0
精玄米重(kg/a)	590.0	611.0	97%	510~540